



Kakehashi

かけはし 第45号

ジェンダー平等でひらく未来
～誰かのためじゃない、あなたのために～



作：emio



SDGs目標5は「ジェンダー平等を実現し、すべての人の権利を守ること」です。

【編集・発行】彦根市男女共同参画センター「ウイズ」
【編集委員】大山純子 中川原大樹
【協力】ウイズで集う会

令和8年3月1日 発行

ウィズスペシャルウィークス

◎ 場所 彦根市男女共同参画センター「ウイズ」

3/7 sat.
11:00~15:00

ウイズ
マルシェ2026

予約不要 / 雨天決行

出店団体数は22団体を予定！
昨秋のマルシェをパワーアップして開催！！

3/7 sat. ~ 3/14 sat.
11:00 ~ 16:30まで

3/14 sat.
13:30~16:30

第40回 彦根市男女共同参画

フォーラム

テーマ：「出会い×男女共同参画」
公演団体：プレイバック劇団ウイズ

- ★第1部 プレイバックシアター テーマ「出会い」
- ★第2部 ホットタイム※お茶・お菓子付き

事前申込制 (先着順)	参加費 無料	定員 50人	手話通訳・託児あり (託児は0歳~未就学児) 申込×切 3月7日(土)
----------------	-----------	-----------	---

TEL、FAXまたはウイズ窓口にてお申込みください

ウイズ登録団体やウイズに関わりのある団体が作品の展示や販売、活動紹介ポスターの展示、体験会などを実施します。

イベントの詳細は
Instagram
をご覧ください



編集後記

20代の女性2人から聞いた生の声。社会の当たり前や思い込みによって、自分の想いを発する難しさや自らの望む選択が制限されるのを感じた。

30代の男性である私も、周りや社会のイメージや期待、こうあるべきというものに自分自身の行動や選択が縛られている。ジェンダーに限らず、ハンデキャップを抱える人やマイノリティに属する人なども同様に生きづらさを抱えているのではないか。

「自分には関係ない」と感じる人も、本当に関係ないだろうか。自身の大切な人がそんな生きづらさを抱えているかもしれない。デジタルツールで気軽にやり取りができ、今やAIが話し相手や相談相手になる時代。過激な発言が世間をにぎわせる一方で、ふとした一言がハラスメントと言われ、発することに臆病になってしまう。違いが尊重され、互いの生き方を受け止め合える寛容な社会をともに創りたい。

(中川原 大樹)

昨年、男女共同参画センターの設置が地方公共団体の努力義務と法律に定められた。古い因習や男性優位の意識が残る地域には若い人は居つかず、衰退していきだろう。魅力のあるまちづくりは男女共同参画が不可欠、が国の方針だ。

「かけはし」の創刊は1993年。当時は女性広報誌だった。私は編集委員に応募し採用された。それから33年が過ぎた。男女平等を意味する男女共同参画という言葉ができ、プランや法律や条例ができた。実行委員会形式のフォーラムは現在も続いている。男女共同参画センターウイズが誕生したのは2003年。講座や相談事業が行われ、様々な活動やイベントに市民が参画し、たくさんの気づきや学び、出会いがあった。ウイズの存続が危ぶまれる今、また編集委員になり彦根市の男女共同参画の歩みを考える。

彦根市は市民と協働しながら、男女共同参画社会をどのように実現していくのか、しっかりと見守りたい。

(大山 純子)

彦根市男女共同参画センター「ウイズ」

☎ 0749-24-3529

✉ 〒522-0041彦根市平田町670

📧 with.hikone@oboe.ocn.ne.jp

自分には関係ない？あなたの当たり前が、誰かの生きづらさになっていませんか？

皆さんは「ジェンダー」という言葉からどんなことが浮かびますか？ジェンダ「男だから、女だから」と社会や文化が作り出した「イメージ」や「期待」「こうあるべき」といったことは、自分たちが持っている思いこみや当たり前は、

一とは、生物学的な性差（セックス）ではなく、社会的・文化的性差のこと。家庭や職場での役割や責任の分担はもちろん、人々の意識や考え方・コミュニケーションにも反映されます。誰かの生きづらさになっているかもしれません。



彦根市内在住のジェンダーに関心を持つ若者世代の女性2人に話を聞きました!!

Aさん 20代・大学生
ジェンダーを研究するゼミに所属し、大学の男女共同参画計画に提言した経験がある

Bさん 20代・社会人
県内でジェンダーに関心を持つ若者世代で活動を行っている

1 ジェンダーに関心を持ったきっかけは？

Aさん 小学校高学年の頃、父は単身赴任、母も働いていた。家事は母がしていたが、父が赴任先から帰ってきて何もせず、「なぜだろう」と思ったのが最初。自分の声が低く、愛想がないと言われることも多くて、愛想は別に女性だけに求められるものではないだろうと感じていた。これらはジェンダーの問題だと中学校・高校の時に分かった。

Bさん 大学に入り、テニスサークルを見学した後の飲み会で、初対面の男性先輩から「ちゃん付け」で名前を呼ばれることに強烈な違和感を持った。入学式にヒールの靴を初めて履いたが、履けたものではなかった。慣れたら大丈夫と言われたが、なぜ慣れないといけないのか、どうしてこんな靴を履くのか分からなかった。

2 ジェンダーのことでどんな生きづらさやしんどさを感じましたか？

Aさん 就職活動の面接で、いずれ管理職になりたいことを話すと「そういうことを言う子なのね」みたいな雰囲気を感じ、役員からは「女性は出産とか結婚で辞めちゃうから管理職にならないんだよね」と言われた。別の会社では「私たちの考えをアップデートしていかないとね」と軽く受け流されたような返事でとてもショックだった。女性という属性だけでそんな風に言われるんだなと。ジェンダーの話を大学の友達に話すと「思想が強い」と言われることもある。怒りや疑問を強く感じる。

Bさん ヒールの靴の話のように「なぜ選ばせてくれないのか」「こんなにしんどいことを強いられないといけないのか」と疑問や怒りを持った。就職活動をした時も、女性は化粧をすることが「身だしなみや最低限の礼儀。清潔感」と言われた。ありのままではいられないんだなと思った。化粧をしていないほうが、すぐに顔が洗えて清潔ではないのかと思うのだけど…友達から「最終面接はスカートで行った方がいい。それが採否に関わるから」と言われ、意味が分からなかった。しんどい思いをしているけど、しんどいってことにすら皆が気づいていないのではないかな。

3 ジェンダーの問題ってなぜ起こる？社会に対して感じることは？

Aさん 今の社会では生きづらい人の声は無視されているんじゃないかと思う。どうせ変わらないという諦めもあると思う。私は20代だが、社会が変わるのはとても時間がかかると感じる。

Bさん 環境問題に関心があり、大学在学中に熊本県水俣市の水俣病を語り伝える団体でインターンをした。そこで、水俣病で苦しむたくさんの人々が軽視され、国全体としての成長が優先された歴史を知った。環境問題を人間と自然だけじゃなくて、そういう社会の構造、人と人との権力関係とかも含んで考える必要を感じた。その視点で生活していて、ジェンダーの問題も同じことが言えると気づいた。相手が避妊してくれず妊娠し結婚した友人が2人いる。2人とも子育てを一生懸命しているが、夫婦間の育児・家事負担の違いや仕事を続けられないことへの嘆きをよく聞く。同じ教育を受けた身近な友達に問題が降りかかって、自分たちは自分の身を守る術や自分の体のことを自分で決めることが権利だと教えられてこなかったことに気づき衝撃を受けた。男女の力の差や嫌と言えない環境が社会にあると感じる。

4 男性の生きづらさもあると思うのですが…？

Aさん Bさん 「たくさん働かないといけない」「しっかりしないといけない」「泣いてはいけない」とかそういう世界観を男性自身しんどいと思いながらも保ち続けているように感じる。男性もそういうことを気軽に話せる場や学ぶ場が必要だと思う。

5 ジェンダーは自分には関係ないと思ったり、社会も変わっていないと思いますが…？

Aさん 母とも高校生の頃からずっと話してきて、「ちょっと分かってきた。私がこんなにしんどいのって個人の問題じゃなく、そういう社会構造が問題でおかしいんだと気づいた」とようやく言うようになった。時間がかかるし、地道にやるしかないのかなと。こういった問題に気づくまでが大変だと感じるので、知ってほしいし、気づいてほしい。そうしたら何か変わるかもしれない。こういうことを話す場もあまりないし、話づらいのだと思う。

Bさん 社会の空気を一気に変えるのは難しいから、小さな集まり・身の回りの人から始めて、こういったことを話すのは普通のことだという空気ができたらいいと思う。道のりは長く、いつまでやらないといけないのかなと思うけど、やらなかったら解決しないし、だったらやるしかないかなと。ジェンダーの問題に気づくと怒りもわくけど、自分たちの社会ってこういう風になってきているんだとわかり面白いし、自分のせいじゃないんだと思えて、生きやすくなった。

あなたにおすすめする10冊の本



- 「男らしく、女らしくがいいの？」
西田征史/鈴木友唯
ほるぷ出版
- 「おしえてジェンダー!『女の子だから』のない世界へ」
プラン・インターナショナル・ジャパン 合同出版
- 「男尊女子」
酒井順子
集英社
- 「人生のやめどき」
上野千鶴子/樋口恵子
マガジンハウス
- 「ジェンダーの扉を開こう自分らしく生きるために」
村田晶子/森脇健介他
大和書房
- 「男子が10代のうちに考えておきたいこと」
田中俊之
岩波書店
- 「わたしリセット」
田嶋陽子
文藝春秋
- 「どうして男はそうなんだろうか会議」
清田隆之/澁谷知美
筑摩書房
- 「女の子に生まれたこと、後悔してほしくないから」
犬山紙子
ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 「パパの家庭進出がニッポンを変えるのだ!」
前田晃平
光文社

いずれも彦根市立図書館で借りることができます

Start 1947

ジェンダー平等へ 向けた法律の歴史

※主な法律や説明を記載しています



女性差別撤廃条約を日本が批准して40年。
ジェンダー格差の無い社会を目指して
たくさんの法律ができました。
あなたを守る法律を知っていますか？

①女性差別撤廃条約批准

日本が批准した国際条約で、男女の完全な平等の達成に貢献することを目的に、女性に対するあらゆる差別を撤廃することが基本理念です。この条約批准をスタートにして国内の法整備が進みました。

②男女雇用機会均等法

企業は採用や昇進で性別による差別をしてはいけないという法律で、以後何度も改正し、改善を重ねています。

③育児・介護休業法

育児や介護を行う労働者を支援するためにできた法律です。段階的に細かく改正を重ねているので、該当する人はこの法律の改正に注目して制度を利用しましょう。

④男女雇用機会均等法 (改正)

事業主に対して職場でのセクシュアルハラスメント防止措置を取ることを義務付けました。

⑤男女共同参画社会基本法

男女が平等な社会をめざすために初めてできた基本法。前文には「男女共同参画社会の実現は21世紀の我が国の社会を決定する最重要課題」だと書かれています。公布から27年経ちましたが日本の男女平等度はまだ世界148カ国中118位(※)です。

※世界経済フォーラム (WEF) による調査2025年 6月

⑥介護保険法

この法律でそれまでの家族が主体の介護から、新しく「介護の社会化」が進み、今では介護保険の利用が当たり前になりました。

⑦ストーカー規制法

この法律ではじめて、つきまとい等のストーカー行為への刑事処罰が課せられるようになりました。今ではネットストーカー行為も対象になっています。

⑧DV防止法

配偶者やパートナー間の暴力問題は「夫婦喧嘩」です。これまででしたが、配偶者からの暴力の防止と被害者の保護を図ることが定められました。この法律で配偶者暴力相談センターができて、相談から自立までの体制が整備され、「DVは許されない重大な社会問題だ」と広く理解されるようになりました。

⑨少子化社会対策基本法

進行する少子化に対処するために、子どもを安心して生み、育てる社会や男女共同参画社会の形成を目指すことが基本理念です。地方公共団体は施策を策定し、実施する責任があります。

⑩女性活躍推進法

男女平等の環境整備と労働力の確保を目的にできました。10年間の期限付きの法律でしたが、2036年まで期限が延長されました。女性の管理職が増えるなど、女性も働きやすい職場環境の実現に向けて、改正を重ねています。

⑪政治分野における男女共同参画の推進に関する法律

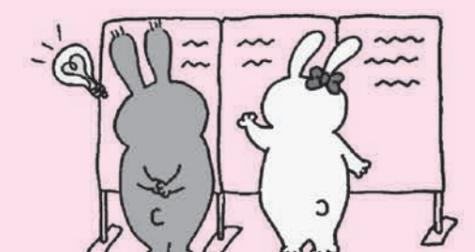
女性の政治家を増やすために、「国会や地方議会選挙で男女の候補者数をなるべく均等に」と政党に促す法律です。強制力や罰則規定はありません。政府は2020年に定めた第5次男女共同参画基本計画で「2025年までに女性候補者比率を35%に」と目標を立てましたが、2024年10月実施の総選挙では、候補者に占める女性の割合は23.4%、当選者に占める女性の割合は15.7%です。

⑬育児・介護休業法 (改正)

「産後パパ育休」と呼ばれている制度。これまでの育休とは別に、赤ちゃんの出生後8週間以内に父親(主に)が4週間の育児休業を取れるようになりました。

⑭男女共同参画社会基本法 (改正)

成立以来はじめての改正。地方公共団体に拠点(男女共同参画センター)の機能を担う体制の確保などが努力義務として加えられました。



私が、初めてウィズを訪れたのは16年前の10月でした。当時勤めていた職場のハラスメントに関する悩みで相談室を利用したことが私と男女共同参画との始まりでした。

当初は、男女共同参画なんていう言葉も意味もあまり理解しておらず…就職面接のために男女雇用機会均等法という言葉覚えてなあくらい(-_-;)そして、たまたま目にした相談室の案内チラシで何気なしに訪れた場所でした。そんな私を職員さんが「もう大丈夫よ～」と優しく声をかけてくださり、人間関係に疲れていた私にとって、話すことでこんなに楽になるんだ！声を出していいんだ！と気づくことができ、「大丈夫」の一言で心を救えるこんな人たちと一緒に仕事がしたいと思ったことがきっかけです。

それから、月日は過ぎ、今では「大丈夫よ～」と声をかける立場となりましたが、あの時の職員さんのように相談者さんの不安を軽くする言葉がけができていたのだろうか…いや!?あの先輩方には一生敵わないな。

40代 女性

男女共同参画という言葉を意識するようになったのは、友人にウィズで集う会に誘っていただいたからです。それまで言葉は知っていても積極的に行動を起こすことはありませんでした。この会の活動に参加するようになってからは、無意識にもこの「男女共同参画」という言葉に反応するようになり、これでいいのか？と疑問を抱くようになり、今までよりも声をあげられるようになりました。

また家庭においても話をするようになり、できる事から取り入れるようにしました。

周りを見渡せばまだまだ改善を要することは多くあります。地道な活動や学びの場がもっと必要と実感しています。

誰もが生活しやすい社会であることを願います。

70代 女性

私が小学生の頃、ランドセルの色が赤やピンクは女の子、黒や紺は男の子に分けられていた記憶がありますが、父は休日に料理をふるまってくれ、母はスポーツや職場で活躍した話を聞いていたからか、性別の固定観念に関心を持たずに育ったように思います。

しかし、ウィズとの出会いを通じて、様々な性別に対する問題は、まわりまわって家庭や職場、学校、地域など自分のとても身近に存在していると気づきました。そして、人々が声を上げ、法整備や多様性を認め合うことで社会が変わってきたことも学びました。

誰もがいきいきと自分らしく暮らせる社会を実現するための様々な取り組みを知り、「声をあげること、話を聞くこと、行動すること」「その人がどうしたいかが大切」「正しい情報を得て、偏見や思い込みにとらわれずに考えること」がよりよい社会への第一歩だと思いました。これからも、自分には何ができるかを考え、視野を広げて学び続けていきたいです。

30代 女性

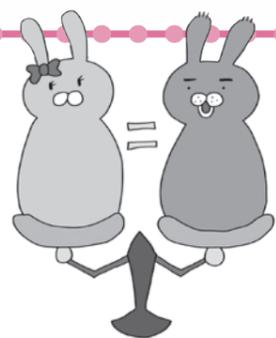
「働く婦人の家」を働かない婦人の家と一部で揶揄されていた昭和時代、私はほとんど無関心でした。

時代を経て「男女共同参画センターウィズ」で様々な講座、研修を受け、社会のあらゆる場での男女共同参画について道半ばですが、少しは理解ができたと思っています。また、多くの人と出会い・交流することで健康で喜寿を迎えることもできました。

今後もウィズでの貴重な体験を基に自己研鑽をし元気な日々を送ろうと思っています。

結びに「ウィズにアッパレ！」を。

70代 男性



私と男女共同参画

Gender Equality Throughout My Life

※この文章は、市民活動や彦根市男女共同参画センター「ウィズ」の取組に長年関わってきた市民によって綴られたものです。

性別によって扱われ方が違うことに気付いたのは、とても幼い頃だった。私の人格形成には様々な要因が影響しているが、中でも「女」としての性別役割分担意識を、スポンジが水を吸うように内面化していった。成長に伴い、そのことの差別性に気づき自分が生きやすいように、どうしたいか考えそれを実践していくことを課した。職場や地域での役割を体験する中で「ジェンダー」という言葉を知り、私の「怒り」は、ここにあると理解した。テレビや雑誌などでの女性の扱われ方、地域や組織の中で、今も少なからずジェンダー不平等は存在している。そのことが、女性の生き方の選択肢を狭め、ひいては、男性の生き方にも影響を与え、現在のまだまだ息苦しい社会がある。私の「怒り」を少しずつ鎮めたのは、性差別の現状を学んだこと、ウィズで出会った仲間や、そこに集う人たちと繋がり行動してきたから。

男女共同参画社会の実現を21世紀の最重要課題とした国も施策を充実させてきている。彦根市も今こそ「ひこねかがやきプランⅢ」の実現のために連帯し協働しよう。少しずつ変化してきた社会に明るい未来を見たいと思う。

70代 女性

男女共同参画センターに関わるようになって18年ほどになる。フォーラムの企画や子ども食堂など、地域の人たちと活動を続けてきたが、「男女共同参画」という言葉に、長く確かな実感をもてずにいた。それでも活動を続けるうちに、少しずつ自分なりの実感が芽生えてきた。

たとえば子ども食堂では、調理が得意な人が調理をし、子どもと関わるのが好きな人が子どもを見守る。そこに男女の区別はなく、自然に支え合う温かさがあった。そうした場で私が感じていたのは、男女共同参画やジェンダー平等というより「フェアネス（公正さ）」に近い感覚だ。公正とは、皆を同じに扱うのではなく、それぞれの違いを理解し合うこと。一方で、男女共同参画は、そうした関係性を支える制度や環境を社会の中に整えていくことなのかもしれない。

「ジェンダーギャップの解消」として、ある分野に女性を増やすべきだという議論も多い。けれど、数の問題だけが本質ではないと感じる。大切なのは、その背景にある当たり前だと思ってきた仕組みや考え方を問い直すことだと思う。むしろ、こうした問いが生まれること自体が、社会が変化を受けとめ始めたしるしなのではないだろうか。市民である私たちが男女共同参画を進めるという取り組みは、完璧な答えを出すためではなく、「どうあるべきか」という問いを社会に投げかけ続ける営みなのだと思う。暮らしの中の思いやりと、制度としての支え。その両方を問い続けながら、誰もが自分らしく生きられる社会をめざしていきたい。

50代 男性

男女共同参画というと少し難しく感じたり、自分には関係がないと思う方もおられるかもしれませんが。しかし、実は家庭や地域の中にこそ、その考え方を大切にする必要があると思います。

現在は共働き世帯が増え「男性は仕事、女性は家庭」といった固定的な役割分担では生活が成り立たなくなっています。私も家庭では、できることは自分で行うよう心がけています。

地域社会でも、かつては男性中心で行事が運営されていましたが、今では男女が協力して活動する姿を見かけるようになり、私もその一員として関わっています。

男女共同参画を進めるうえで大切なのは「これは当たり前前」と思っていることに気づき、少しでも変えていこうとする意識だと思います。

少子高齢化が進み、家族の形や価値観が多様化する中で、性別にとらわれず誰もが活躍できる社会を家庭や地域から築いていきたいと思っています。

60代 男性

彦根市は国の男女共同参画社会基本法制定を受け、県下に先駆けて推進条例を制定しました。男女共同参画の概念も手探りの中、市民団体による勉強会が複数立ち上がり、拠点施設の必要性が強く訴えられていました。市はその声に応え、「男女共同参画センターウィズ」を設立。市民への啓発活動は市民とともに、施設運営も市民に委ねるという理念のもと、指定管理者制度が導入されました。この取り組みは県下でも先進的であり、市民として誇りに思えるものでした。

20年以上にわたり、ウィズを拠点とした活動は、性別役割分業意識の解消や男性の家事・育児参加の促進、女性の社会進出支援など、着実な成果を上げてきました。ようやく目指していた社会の入り口にたどり着いた今、国でも拠点施設の設置を努力義務とする法律が成立し、こうした施設の重要性が再認識されています。

今後も、地域の課題解決や市民の学び・交流の場として、拠点施設の存続と充実が不可欠です。私は「ウィズで集う会」の仲間とともに、男女共同参画社会の実現に向けた活動をこれからも続けていきたいと考えています。

70代 女性